

事例から教えられること

—— 母親との対応から ——

小池省吾

この報告書は、事例から次のようなことを学んだ。

- (1) 最近、思春期に何らかの挫折をした子どもが、混乱し常態に復するまで長い時間を要する事例が増えてきた。それだけ病んでいる状態が深く、重い。社会の急激な変化がどんな影響を与えているのだろうか。
 - (2) 母親の変容していく過程にどんな特徴的なことがみられるか。
 - (3) 家庭内で乱暴する子どもにみられる特徴的な行動やその背景など。
- 以上のことを紹介しながらまとめた記録である。

I はじめに

いつの時代でも子どもは、彼らが住んでいる社会の特徴を敏感に察知し、反応する。最近、子ども達に様々な問題行動がみられる。アメリカやヨーロッパで特に著しい傾向がみられると言われているが、わが国でも例外ではない。

しかも、アメリカやヨーロッパではあまりみられないと言われている、子どもが親に乱暴な行為（家庭内暴力）をふるう事例が地方都市にも増えてきている。社会の変化が、どんな影響を与えているのだろうか。

II 社会の特徴の変化と影響

社会は、（それがどんな小さな集団であっても、また地域や国であっても）時代の特徴を持っている。それは、子どもが成長していく過程で、人格形成に大きな影響を与えている。ある時は、彼らに勇気を与えたり、逆に欲求不満にさせたりする。また社会は、人々が社会の一員として為すべきことを、きちんとすることを要求する。

D. リースマンは、社会心理の立場から、人口推移の事実や社会経済の発展程度を目安に、社会の特徴がどのように変化するか、3つの局面を仮定して述べている。参考にしながら考えてみたい。

(1) 伝統的思考に依存する社会

第1次産業部門が主な社会で、人口はこれから増加しようとする時期にある。社会は、個人の活動が伝統に対する服従と言う方向に決められている。そして社会は、その形成と安定を図るための鋳型をもっている。人々の行動は、儀式とか、きまりで細かなところまで決められている。

この社会は、変化が相対的に遅く、家族や血縁集団への依存が高く、価値体型は固定している。人々は、ある意味で心理的には、自分の家族や集団から十分に自分自身を切りはなしていない。

個人の人生の目標に関して言えば、自分の人生を自分できり拓くことができるなどと誰も考えてはいない。こうした社会から、様々な変化（農業技術の改良、保健衛生の向上、交通機関の発達など）の積み重ねにより、人口の急激な増加が可能になる。

(2) 内部指向に依存する社会

社会は、急激に増加する人口を養うため、大きな経済力が必要となる。そして、第2次産業部門の社会へと発展していく。それに対して人々は、社会への要求も異ってくるし、選択の中も広がる。

この社会では、伝統に頼らずに生きていける人が必要になる。即ち、人々は、個人の要求するものと、社会が要求するものとのギャップを調整しなければならなくなる。大人は、子どもに、「自分の人生は、自分できり拓いていくものだ」と言う考えで望む。

このようにして子どもは、自分の人生を自分でコントロールする感覚を身につけるようになる。しかし、だからと言って経験から学ぶことができないとか、世論を気にしないと言うことではない。

(3) 他人指向に依存する社会

社会は、内部指向に依存する社会から、増えすぎた人口をおさえ、高まる人々の消費の要求にこたえるため、ますます資本の追求と蓄積をはからなければならない。

商業を中心とした、サービス部門やコミュニケーションを中心とした社会を向かえる。人々にとって価値の領域が大きく変化する。豊かな物質生活とレジャーが増えてくる。様々な人種や国、文化との接触が多くなる。社会は、中央集権的な官僚制になり、人々はその中で生活しなくてはならない。教育の向上、レジャー、サービスの拡大と並んでマスメディアが発達する。

この社会では、複雑な人間関係に適應するため、より開かれた行動を身につけることが要求される。家族は、小規模化し、育児の方法も変ってくる。大人は、子どもたちに、「友達仲間で人気者になることや、友達つきあいが上手になること」を望む。

学校や仲間集団からのいろいろな圧力は、マスコミを通じて増巾される。この社会における個人の方向づけを決めるのは、直接的であれ、間接的であれ身近かな人物である。

大人は、子どもに人生の目標をうえつけているが、それは、行動を意識的に何回も練習させることで生れてくるのではない。子どもは、他人の行為や願望を實におどろくべき感受性で、知らず知らずになんか身につけていくのである。

このような3つの局面について、私たちは、それぞれの社会を切りはなして考えがちであるが、このような社会が、特定の国や地域であるとか、時代がきっちりと区分されているということではない。

しばしば、強く出る特徴によって、あたかも決った社会に生きているようにみえるが、人々は、どの社会にも適應していく能力を持っている。

どのような個人、どのような集団や国も伝統に対して強く依存しないで生活することはあり得ない。わが国においても、集団、地域、などにより様々な様相を現わしている。子ども達にどのような影響を与えているのだろうか、考えさせられることが多い。

Ⅲ こどものかかえる悩みの深さ

最近、子どもの問題行動もずいぶん様が変わってきたように思う。以前から、子どもにみられる問題行動には、2つの型がある。

1つは、社会の規則や秩序に反し、刑法犯や触法行為に当たる行動（非行）がある。他の1つは、社会に背をむけて、逃げ出そうとする行動である。特に、自殺とか家出、登校拒否や薬物乱用などがある。

これらの問題行動が、増加の傾向にあるとか、低年齢化、グループ化していると言うことをよく聞く。また、ごく普通の家庭の子どもがという質的变化も含めて、多くの調査、研究の示すところである。

しかし、最近、長びく登校拒否や、わが国に特徴的だと言われている家庭内で、子どもが親（主に母親）に乱暴する（家庭内暴力）事例が、地方都市にも多くみられ、医療機関から紹介されたり、直接来所し、相談するケースが増えている。

特に事例の多くは、思春期に何らかの挫折を体験し、本人の性格的なことも重って、深く重く病んでいるように思われる。

事 例 1 高2 女子 （16歳） 概 況

A子は、ほぼ1ヶ月ほど登校せずに家にいた。その後登校したが、3学期のある日、青い顔をして帰宅した。「明日から学校へ行かない」と言ったまま、カバンを投げ出した。母親は、突然のことなので何のこともやら解らず、最初は、あっけにとられていた。ただ「もう、学校へ行かない」と言うA子に、とりあえずその理由をたづねた。

それによると、1、2学期の成績が悪く、教科担当からA子の担任（A子の兄を受け持った）に連絡があった。学級担任は、A子に「お前の兄さんは、しっかり勉強していたぞ、妹のくせにしっかりしないとダメじゃないか。遊んでばかりいないで勉強しろ！」と言った。A子は、いつも何かあると、兄と比較されて、せつないと言っている。期末試験も近づいているので、親は、心配して家庭教師をつけてやったが2日間でやめ結局、期末試験も受けなかった。A子は、「あの先生も私を助けてくれなかった。先生のそばに居ると気がつまっちゃう」と担任のことを言う。担任から電話がくると、A子は、ブルブルふるえて泣くばかりで電話にも出れない。

3学期は、殆んど授業に出れず、部活と学校行事にすこし参加する程度であった。友人関係は、部活のチームメイトと幼友達ぐらいである。

A子は学年末の成績査定では、それでも条件付きで、単位修得が認定され進級した。

A子は、春休み割合元気に過した。新学期になって、数日登校したがその後、部活や学校行事に参加したり、友達と旅行する程度で殆んど授業には出席しなかった。

A子は、友達と何の屈託もなく、むしろ楽しそうにさえ見える。また或る時は、ばったりとふさぎこんでしまう。家庭では、父親とは全く口をきかない。母親には、精一杯感情をあらわにして、攻撃的になったり、退行行動を現わす。

A子のその激しさ、極端さは、一体何であろうか。思春期に挫折した子どもの特徴なのだろうか。であるなら、顕著な特徴として、捕えられる状態があるのだろうか。また性格的なことが重っていると考えられるのだろうか。

事例の経過を追いつ検討を加えてみたい。

・経過と考察

A子が登校できなくて20日ばかり経ったある日、母親が来所した。A子は、「勉強しなければ、先生におこられる」と、まるで何かに追われているような様子を現わしている。さらに、「私の頭の中は、空っぽ……」などと言いながら、学校のことが気になり、「……学校へ行かなければ……」と、母にタクシーで送らせる。しかし、校門までくると、突然青い顔をして、「帰る。帰る。……はやく、」と言いタクシーをひき寄せさせる。

A子は、学校へ行けないことがひどく罪のような感じさえて、イライラしているようだ。

神経症的な不安傾向や強迫傾向を強く現わしている。

一方、A子は、「どうして、こんなに頭の悪い私を産んだの!」と母親に食ってかかる。母は、「Aちゃんのために先生や、みんなが心配してるんですよ。登校しなければ、……」と言うと、A子は、「その言い方が、私をイライラさせるんじゃない。学校へいけなくなったらどうするの、何時も私をそう言うふうに悪者にして、お母さんばかり、いい子ぶって!。私が苦しんでいるのに!」とヒステリックになる。またA子は、「お母さんが変わらなければ、私が変れないでしょ。」と言いながら、話が友達や学校のことに及ぶと、「そうやって、みんなで私をいじめる。私なんかこの家に居ない方がいいと思っているんですよ。………いらぬ子なんですよ。……家出する」と言い出す。母は、たまたま「こんな状態じゃ駄目だから、………休学したら……」と言う。A子は「お母さんが、みんな悪いんだ。顔をみるのも嫌だ」と言ってイライラしている。

A子自身の問題について、親や先生や周りの人のせいにしたり、恨んだりする。時に強くなると妄想のように思うことがある。あるいは極端に集中力がおちて、客観的な判断がくだせないような状況がみられる。

上記のような状態が、更に変化して、A子は「鬼ババ、あっちへ行け、死んでしまえ!」と母を叩いたり、つねったりする。イライラすると、母の頬をたたいたり、へらへら笑いながら物差で母の膝を叩く。話が、友達や学校のことになると、泣きわめいたり、物を投げたりする。

不登校が長く続くと、周りの人に嫌がらせをしたり、乱暴な行動など、逸脱した行動が現われる。

逸脱行動が割合に長く続いたA子は、その行動が少しずつ変化しながら、昼夜のリズムが狂いはじめる。友達の訪問、電話や学校のことは、全然受けつけない。「お母さん、電話に出ておいて……」とか、「玄関に出て、私誰れにも会いたくないから……」と言う。また、夜遅くまで母親をそばにおいて、母親が寝ようすると、寝せない。家からは、殆んど出られない状態である。本を読んだり、深夜放送に耽ったりする。

生産的なことは殆んどできず、昼夜の逆転、ラジオ、テレビを見たり、聞いたりする程度で、動きもすくなく、無気力状態になる。

今までの経過で最も長く続いた状況で退行的な行動がある。母親は、A子が中学に入学する頃からパートに出ていた。A子は、母親の帰りを待ちわび、「どうして、早く帰ってきてくれなかったの! ……お母さん、そばに居て、一緒に寝てちょうだい」と、しばらくの間、自分の部屋で母親と1つの布団に寝ていた。しかし、時には「あっちへ行行って頂だい。……ほっといて!」とまるで3歳児のような言動をはくことから始まった。夜中に、足や腰をもませたり、到底家にはないような物や、食べ物をねだったりする。また、A子は、「お母さん、パート辞める、辞めると言いながら、まだ辞めない。早く辞めて!」と言いながら、何とか母をパートに出させまいとする。時間的に間に合わなくなった母は、「じゃ、今日は行かないね。」と言うと、A子は「やったー」と叫んで手を叩いている。

身体は、母より大きく、しかも女性らしくなっているのに、言うことを為すことがまるで、幼児のような行動をする。

A子は、様々な状態を現わしながら、10ヶ月程経過した頃から、少しずつ変化をみせはじめた。15ヶ月位になると経過の中で一番長かった退行行動がすくなくなった。無理難題を殆んど言わなくなった。イライラした、不安定な状態は、残るが、回復が早くなった。進路選択も夢のようなことから、より現実在即した方向を示し始めた。

・ 母親の様子

(1) 母親は、「A子は、兄に対して成績の面でコンプレックスを持っている。高校進学時まで、お兄ちゃんと同じ高校、同じ大学へ行く目標を決めていたんですよ。」「だけど、A子が高校へ進学するとき、かなり無理した、背のびした感じがしました。」と言う。

家庭での躾について、母は「幼い頃から、A子が歩く道に石があれば、それを取り除いて歩かせるような感じ。主人は、いつも口ぐせのように、A子に気をつけて育てろ!と言うし……、私は、毎日がピリピリしていました。」

と述べている。

父親の溺愛、母親の過保護をA子の兄は、「A子は、過保護に育ったから、……俺なんか割に小さい頃から両親にかまってもらえなかった。……淋しい時もずいぶんあった。」と漏している。

(2) 私は、夫とA子の間に入り、心労が続く。

A子は、父親と口もきかない。夫は、仕事第一で、帰ってくると「俺は、疲れているんだ。A子を何とか学校へやらせろ。おまえは家にいて何をしてるんだ……」と言う。

また、母親は「私もしつこくて、あの子を傷つけていたんでしょうね……それに私とっても泣き虫なんです、いまは、あの子にすきようにしてやりたいんですが、……どうしたらいいのか……わからないんです。…」
「あの子が、進級できたのは、先生方の恩情なんですけど……、もう少し温かみがあってもいいんじゃないかと思うんです。……」「……先生に、義務教育でないんですからと言われますと……解っているんですが……」と学校に対する不信をのぞかせる。

(3) 「A子は、学校へ行けないことが罪悪のように思っているみたいなのところがあるんです。……そんなふうを考えなくても、いいと思うんですが。……」

母の気持をみすかすように、「私をためしているようなところが見えるんです。私がパートへ出たいことや、本当は、学校へ復学してもらいたいことを……。たとえば、2年かかっても3年かかってもいいから……と言う私の気持を」と言い、さらに「でも、本当は、いいんです、A子にまかせればいいんです」と言う。

(4) 母親は、A子の状態をみて、「以前に比べると、A子の顔付きがずいぶん穏やかになってきたと思います。A子と居るのが、あまり苦痛でなくなりました。あまり無理難題を言わないし、嫌がらせが殆んどなくなりました。」と言っている。

心配が少しづつなくなっているが、「こんなに長く続くのは、精神病じゃないかと心配で、知りあいの医者に相談したんですが、大丈夫と言われたんです。でも……あまり長くなって……」と不安をあらわしている。

それに、「友達の家に、一人で泊りに行ったり、旅行に出かけたりするんですが……、家にばかり居るのも心配ですが、………」と言いながら、「でも一方では、進路について、現実的な（専門学校）方向を示し、私に願書を取ってくれと言うようになったんです。」と話す。

A子は、受験するまでの手はずを整えたが、結果的には実際受験できなかった。

母親は、「それでも、私の方が、ぶーっと余裕をもてるようになったんです。あまり急がないようにしようと思うんですが……どうしても、少しいいとつい、……」と述懐する。

- A子は、学校に行かなければならないと言う強迫的な状態や強い不安が現われた。ほぼ時を同じくして、思考の混乱状態を現わし、逸脱行動が現われ始めた。そして無気力な状態になり、長い登校拒否に入ってしまった。

このような状態を一進一退しながら、経過していった。経過の中で終始、現われていた退行行動は、他の状態がうすらぐと共に、少しづつ現実的な方向に向い現在に至っている。A子が常態に復するまで、多少時間が必要と思われる。

A子は、新しい未来選択をしつつあるが、自分で実際に行動できない。願書を取りよせたが、受験するまでに至っていない。また、A子の友達が、どのような方向へ進むのか、彼女にとって1つの山となる。

A子は、成績の下っていくことに焦り、彼女の指向する目標へなかなか進めないで焦る。一言で言えば、成績にまづき、それを克服できない。性格的な弱さもあり、欲求不満に対する耐性が乏しいのではないと思われる。

ちょっとしたことで挫折しやすく、挫折するとあがく悪循環を繰り返し深みに入ってしまったのではなからうか。A子を取りまく、家庭や学校のきめ細かな対応が必要になってくる。A子が、「葛藤→選択→問題解決」をするときに、どれだけ許容範囲を広げられるかと言うことになる。

家庭では、A子の選択を先ずどれだけ認められるが、学校では、登校したくとも登校できない子を教育の対象としてどう見るのか、もはや高等学校は、「義務教育でないのだから……」と言うことだけでは、対応できないと思う。

- 母親の変容について、おおよそ次のような過程をたどると仮定する。

(1) 「まさか、自分の子どもが、登校拒否だなんて、そんなことがあったまるか」

他人の子どもや、事例として、聞いたり見たりするが、自分の子がまさかと強い否認とそこから逃げ出そうとする気持が働く。子どもを叱ったり、力づくで登校させたりして、親の感情が赤裸々に現われる。親の感情が強ければ、強い程、子どもは動けなくなる。

- (2) 「他の子じゃなくて、どうして私の子が」と強い憤りと怒りを覚える。また他人の子どもを 望する。

子どもが、登校できなくなったきっかけになっている事や人を恨み、そのせいにする。子どもは、登校刺激を加える(登校をうながす、友達や学校に働きかけて電話、訪問、朝のむかえ)と、身体的な信号(腹痛、頭痛、下痢、時には乱暴など)が現われる。この場合、子どもの状態を怠け、仮病、とみる場合が多い。親は、本を読んだり、テレビをみたりして自分の子どもと比較する。さかんに医師や学校と接触する。

- (3) 「もし自分の子どもが、こんなでなければ、もっと幸せな人生を送れるのに、今になって何で子どもに泣かされるのか」と考えたり、「主人は、協力してくれないし、私は子どもの為に疲れはてた」と考えたりする。いろいろな相談機関をまわったり、宗教に救いを求めたりすること多い。

- (4) 「そんなに、くよくよしたって仕方ない」と開き直る。

嫌なこと、子どもの様子(登校しないことに対する不満)を抑えようとする。この時期になると、子どもに登校刺激を与えないようになり、「この子が何を考え、何をしたいか」を、じっくり見ようとする。しかし、一方では本当に精神病ではないかと不安をつのらせる。

- (5) 「この子は、これでいいんだ。この子なりになんとかしようとしているんだ」と考えるようになる。

子どもの小さな変化がみえるようになる。

登校とは直接関係のない子どもの内面の動きが認められるようになる。

この時期になると、多くの親や周りの者は、急ぎ焦る。しかし、せっかく子どもが序々に回復しつつあるのに、まともに戻る場合がある。子どもが、もとの復するまでに、この時期が一番むづかしい。

登校する素ぶりを示しながら、実際には、登校する行動へとすぐに結びつかない場合が多い。学校の対応も難しい。先生や、友達が訪問しても、おいそれと会わない。子どもの内面では、「向えに来てくれて、嬉しい」と言う気持ちが充分にあっても、長い休みの後だけに、「気はづかしさ、とまどい、不安」がうづまく。

登校刺激を与える。時期、タイミング、場面が難しいからだ。

以上のように、親しことに母親の様子の変化を述べてきたが、事例により複雑である。勿論このとおりになるとは限らないが、特徴的なこととして考えられる。

最後に、母親の変容は、実はかかわる者の変容なのかもしれないと最近思う。

今後の課題

- (1) 父親へのアプローチと面接
- (2) A子が安定している時の母親との面接
- (3) 今後のA子の変容と母親の変容の関係

・ 家庭 ・ 家族

変化の激しい社会で、子どもは、強く影響されると先に述べた。家庭や家族もその影響を受けていることは、言うまでもない。

家庭は、一定の役割を持ち、そのメンバーである家族もそれなりの役割を持っている。家庭は、家族にとって憩の場であったり、苦楽を分かちあう場である。

かつては生産の場であったし、学習の場であった。また、その国の文化を伝えるための大切な役割もあった。

最近では、これらの働きがうすれたような気がする。家族が所属するきめ細かい集団単位と言うより、より広い社会の環境の一部となっているように思う。

家族は、互に自分のやりたい事を主張してゆずらない。すぐ、衝突や暴力・離反が起こる。

しかし、逆に母と子、父と子が特に強く結びつくような例もある。また、家族の小規模化がすすみ、子どもを育てる親を主とした家庭の問題があらわになってきている。

特に教育や躾と言う漠然とした場面で考えると、子どもがある一定の年齢になるまで、親が極端に過保護、過干渉であったり、逆に放任、無干渉だったものがあるところから激しく子どもを責めあげるようになってきている。

おとなしく、手のかからなかった「いい子」が、突如として自分を主張し、親に反抗的となる。結果的に登校拒否を起こしたり、家庭内で乱暴するようになる事例も多い。

最近特徴的なことで、心氣的になったり、神経症のような状態を現わす子どもが増えている。事例から経験することであるが、親が、「殆んど反抗期らしい時期もなく、手のかからない子だった」とか、「うちの子に限って～」と言うことをよく聞く。

一方、子どもは、親に「こんな、俺にしたのはお前（親）だ、どうしてくれる」とか、「弟や妹が、俺のようになったら、お前のせいだぞ」と、なじる。また、子どもは、実によく親の顔色をうかがい、敏感に感じとり、「お母さんは、ほんとうは、僕が休まないで、学校へ行って欲しいんでしょう」と親の気持を敏感に感じとり、親の気持をためしているようだという。

親は、子どもの表面に現われる様子は、すぐ察知するが、情緒的・心理的な変化には非常に無頓着なところがあるように思う。

子どもは、心の中で悩み、苦しんで親に解ってもらいたいとするが、なかなか解ってもらえない。この葛藤が、ついには心氣的・神経症的になり、深く重い状態になっていく。子どもの訴えは、通らず、長びく登校拒否や、激しい家庭内での暴力行為となって現われてくるように思う。

•このような状況のなかで、家族にとって、家庭が安心して憩う場であり、苦楽を分けあい、互に切磋琢磨し、成長する場であるためにどのようなふうであつたらよいのだろうか。

それぞれの家族は、他の家族とは異なり、独自性を持っている。しかし社会生活が営めないようでは、問題である。つまり孤立しないためにも家族は、ある一定の社交性が必要である。独自性と社交性のほどよい調和が必要である。

次に家族のメンバーは、互に独立した存在であることを認めあい、一定の距離を持つことが必要になる。そこには、一人一人が、互に信頼し、協調しなければならない。その中から自然に生れる甘えや、ある意味での依存も大切な家族の絆をささえる力になる。

•現在、青年期の子どもを持つ親は、文字通り激動の社会（軍国主義から民主主義、精神主義から物質主義、貧困から豊かさへ）を生きぬいてきた。

親は、確固とした信念と言うよりは、融通性と適応性が求められた。親にすこしゆとりができ、ふと、後をふり返ってみたとき、子どもは、より人間らしく生きたいとその欲求を満たすためのいろいろな価値観を持ちながら成長している。親は、わが子の様子をみて、どのように感ずるであろうか。

子どもが成長していく過程で、様々なかたちで親を問いつめ、つきあげ、批判する。

親がそれに対して、どれだけ答えられるであろうか。子どもが親の欠点をさらけ出し、失策を指適しないだろうかと恐れを感じている。

親とて勿論、普通の人間だから弱さも不完全さも持っている。しかし、ある時期までは、子どもは親に万全を期待するし、親も子どもの期待に応えなければならない。だがそれは、いつまでも続かない。子どもは、期待していた親に失望するし、親も息が切れる。

そのうちに、子どもは、もっと広い社会に目を向ける。そして子どもは成長していく。親は、そうなるまえに、親自身の生活設計をきちんと立てておく必要がある。親のむづかしさをしみじみ感ずる。

事 例 2 中 2 男 子 (14歳) 概 況

B男は、小学校5年になってようやく反抗らしい反抗を現わし始めたと言っている。小学校6年では、一時影をひそめたようだが、中学に入って1年の1学期末頃から、母親が「あの子の顔をみるのも嫌だ」と眉をひそめなくなるような状態になった。家庭では、もっぱら母に乱暴することから始まった。

B男は、学校で目につく行動もするようになった。ツッパリとつきあい、部活動の仲間同志のけんかや、その他の問題行動には、必ずと言っていい程首を突っこんでいる。またクラス担任との折り合いが悪く、特定教科の先生ともあわない。こんな状況のなかで、母親は、ことあるごとに学校へ呼び出された。しかしB男は、休まず登校するし、塾にも通った。進路についての悩みが、親にも、B男にもあった。

学校では、先生方もはりきって生徒の指導に当たっている。

B男は、家庭での乱暴がだんだん激しくなった。両親は、いろいろな相談機関に行き相談するが、B男の乱暴な行為(暴力)は、おさまらずたまらなくなって来所した。

その後、学年も新たまり担任が代って、担任との折り合いは、すこしは改善されたが、やはり特定教科の先生との折り合いは悪い。

一方、家庭では、乱暴が激しくなり、母の入院、加療や父、弟への乱暴な行為がひんばんになる。暴力と極度に甘まえる態度を母親に示す。また、B男は、父親に、「もっと、父親らしくしろ」と言う。母親は、「うちには、2人の母親が居るような感じです」と言っている。そんな状況がしばらく続いた。


激しい暴力を加えていたB男は、自分の感情をすこしは抑えられるようになった様子がみられる。また他との協力もできるようになり、暴力の内容や程度がすこしづつ変わりながら現状に至っている。

・経 過 ・ 考 察

この事例は、前の事例1と基本的には同じく、B男の思春期における挫折と、B男の性格的なことからくる混乱が、家庭内で暴力をふるう行動に出たと思われる。

また、他の国では、あまりみられない行為(子どもが、親に暴力をふるう)、であると言われている。しかし、B男は、毎日登校し、塾にも通っているという点では、事例1と異っている。

家庭で暴力行為を行うようになってから、7ヶ月ぐらい経って、両親が来所した。B男は、几帳面で、病的なくらい潔癖なところがある。中学入学の頃から、「中学に入ると、ツッパリが怖い。やられるんじゃないか」と不安がっていた。また部活動では、身体が大きいこともあってか、上級生にいろいろとごかれていた様子がわかる。

B男は、きまって明日のことが不安になると、イライラして、「俺の言うことがわかってない」と言って暴れる。

ある時、B男は、父親が下水掃除で着た服を洗濯機に入れると、「そんな汚ない服を入れるな」と父親を足げにした。また、B男は、1日1時間位しか着ない服でも必ず洗濯したり、風呂に入ると三回も石けんを身体を洗わないと気がすまないと言う。

自分の進路について、いつも「どこの高校が1番いいの?、だけど、こんなこと(家庭での暴力行為)していると、どこにも入れない」と言いながらイライラしている。

学校のこと、家庭でのこと、進路のことなどに不安や強迫的な傾向を示す。さらに病的なほど潔癖である。

上記のようなB男の行動や、勉強に集中できない様子がうかがわれる。B男はさらに「担任は、おれのことなんか少しもかばってくれない。他の先生が、自分を注意すると、担任はただ黙ってその先生の言うことに従ってしまう。……関係のない先生におこられるなんて心外だ。」と、学校や先生に対する不信をのべる。

ことあるごとに、「自分をこんなふうにしたのは、お前（母）だからな、お前が悪い。あれだけ言ったのに、一向になおらない。俺のように先公（先生）に目をつけられたら、高校も行けない。どうしてくれるんだ。……学校なんかいきたくない。……休むぞ！」と言う。しかし結果的には登校する。

B男は、勉強に集中できないで小学校6年の頃からだんだん成績が下っていく。

自分の行動をまわりの母親や教師のせいにしたり、物事に集中力がなくなり成績が下る。

B男の乱暴な行為は、ずっと続くが、間隔があいたり、母から父や弟へと暴力の矛先が変わる。母の足を棒でたたき、外傷を負わせた。母が入院している間に、父親や弟に乱暴する。あるとき、B男のクラスで、いじめの問題があった。B男は、直接手を出していないが、自分が中心人物と見られていると思いこみ母にそのことを話した。母は「ああそうなの。……あんた何も関係ないんだね。……でも、あんた、何時も何かあると、首を突っこんでいるのね。」と言った。この母の対応に、おこったB男は、また一暴れして、父母や、弟に軽い外傷をおわせた。そのときのことを母親は、「前の乱暴のとき、私が傷めたところをさけて、手をたたくんです。B男は、暴れているが、傷をつけようとか、いためた所をさらに徹底的に攻めようとしているんじゃないみたいなんです。」と言う。

B男は、暴れながら、「俺のこんなことをみて、弟が悪くなったら、お前のせいだぜ」と言って、母の手をねじったり、背中を叩いたりする。

しばらく、B男の乱暴がおさまっていた。ある時B男が仲良くしていた友達とつきあいをやめた（友達の方から、つきあいをやめると言われ）ようなことから、再びイライラしだし、暴力行為がまた激しくなる。

父親は、これ以上B男が暴れるとB男を隔離しなければならなかったと考えたが、どうすることも出来ないでいる。暴れるB男をとめようとすると、「お前なんか関係ない！」とよせつけない。仕方なしに、父親は、近くの部屋で様子をみている。

いつものように、ささいなことで、B男は、母親になんくせをつけ、手をねじり上げていた拍子に、つまづいて、運わるく母親の上ののしかかるような格好になった。その時、母親の手の骨が折れた。

まっ青になったB男は、「早く、お母さんを病院へつれて行け！」……もう俺は、学校へ行けない。お母さん大丈夫か」と泣きわめいていた。母の入院後も、学校や塾へは通っている。Bは、「みんなが、勉強しているのに、俺は勉強できない。ちくしょう！」とぼやいている。

母の入院後も乱暴はすこしづつ続いた。ある時、父親が強く叱責したことがあった。B男は泣きながら、自分の部屋に行くと言う光景もあったと言う。

父親は、「叱らなければならない時は、きちんと叱ることが必要なんです。……私どもももずるかった。……B男に口出ししたり、力で抑えつける（実は、B男は、身体も大きいし、自分はとうていかなわないと思っていた）ことは、かえってB男を刺激する。そしてB男のしかえしを恐れていたんです。」と言う。父親は、また「母親の骨折は、もののはずみだと思う」と述べている。

激しい母親に対する暴力や、父や弟に対する乱暴などの逸脱行動が長く続き、母親の入院、加療と言う大きな犠牲を払いながら、B男の暴力行為は、すこしづつ変化していく。

B男自身、自分を抑えるような様子がみられるようになったと母親は言う。親へのつかかり方もしつこくなくなり、無理難題をあまり言わなくなった。金銭の要求も、衝動的に大きな金額を言うことから、必要な額を言うようになり、必要でなくなれば、きちんと返す。不安定な状態になっても、すぐ落ちつきをとり戻し回復が早い。

また、弟に乱暴して「ごめん、痛かったろう。」などと言うようになった。まだ小さな、乱暴はあるものの激しい暴力行為は、すこしづつおさまっていく様子がうかがえる。

激しい暴力、逸脱行動

B男は、起床時間のもので、母親に「どうして、呼んだらすぐ来ない。俺の気持がまだわからんのか」と言うかと思えば、「いいんだ」と甘えた調子になる。また、「お前たち（父母に向って）が俺の言うこと聞けないのなら離婚しろ」と言うかと思うと、「いや、弁当作ってくれる者がいなくなるから離婚するな」と、まるで3歳児のようなことを言ったりする。

学校で、B男は、「先生、この頃、俺おとなしくなったら」と言ったら、先生が「うん。まじめになったね」と言ったと喜んで親に報告している。

いろいろなものを母にねだるが、「本当は、こんな物、欲しくないんだ。……小さい時（小5、6時頃のこと）俺の方を向いてくれなかったじゃないか、面倒もみてくれなかったし……」と不満をぶちまけている。

母に激しい暴力をふるうかと思うと、まるで小さな子ども、極度に母親に甘えるような様子がみられる。

このような状態を繰り返しながら、B男の乱暴な行動は、少しずつおさまり、落ち着きを取り戻しつつある。しかし、B男には、進学不安や病的なほど潔癖なところがあり、問題は多く残る。

・父母の養育とB男への期待

父母ともにB男を早く自立させたいと考えた。育児書に書かれているように育てたかった。夜は、B男を親から離して別室に寝かせた。そして常に母親は「お前は、何でも一人のできるんだから、自分でやりなさい」と言って育てた。

母は、「B男が淋しいときや、親の床に入ってきたい時もあつただろうと思います。B男は、がまんしてたんですね。弟の方は、別にそんなふうに育てなかった。いつも夫婦の部屋にきてたんで）」と漏らす。

医師やケースワーカーにも相談したが、医師は「精神的に何もおかしくない（精神病じゃない）」と言ったが、父親は、「心配なんです、そんなところへB男をつれていだけで、B男がいつまでも白い目でみられたら、可愛いそうだから……」と言う。

乱暴が激しくなったとき、母は、「環境をかえる……私が別居してみようかと考えたが、B男の弟が可愛いそうなのでやめました」と言う。母はまた、「B男の友達をみていると、どうも芳しくないように見えて仕方がなかった。でも、B男自身も他の子に比べて派手にみえます」と言う。さらに母は、「B男は、何でも一人で、できるのに、口出しが多すぎたでしょうか。……でも…」とB男を肯定的にみようとしながら、つい愚痴が出てしまう。

父親は、職業柄から出てくるのか、「談いを許せない。ある程度、完璧さが要求される。世間は、そんなに甘くない」とB男に言う。父親は、B男の力にかなわないと思い、B男が暴れると、「警察を呼ぶ」と言って、ひと騒ぎおこしたと言う一幕もあった。

B男が「もっと父親らしくしろ」と言ったとき、父親は「私がもっと、しっかりしなければならないとB男が言っているんだと感じました」と言っている。

母親は、「うちには、2人の母親がいるような感じがするんです」と言うし、父親は「B男は、母親に似て、潔癖なところがあると互に相手のことを非難している。

B男が、父や母に相談したり、学校のできごとを報告したりするときの親の対応は、B男にとってどんな感じがするだろう。B男「お父さん、〇〇君と友達になっていいか」、父「私は、おまえの友達について、どうの、この言えないし、言いたくない。自分で決めたら」と言うが、父親は「B男にとって、決してプラスになるような友達でないと思う」と母親と同じようにみている。

学校に対する、かなりの不信を両親とも持っている。父、「あんなことをして刈るんなら、誰れでも反発する。まるで、一人を多勢の先生方がとりまいて言うんですから、私も文句を言いました」と言う。

・B男は、不安や強迫傾向、逸脱行動、他罰的な考え方、退行行動を現わしている。育児書による子育てと、過干渉で神経質な母親と冷静沈着によえるが温かさのない感じの父親がいる。

父親は、B男は母と性格的に似ているとみているし、母親は、父親を無力と評価している。このような両親のモデルと、B男に対する期待（両親の期待する成績や、希望する高校）とB男自身の現実のズレに混乱を生じたと思われる。またB男自身の性格的なものも加わって、経過でみてきたような混乱を生じたのではないだろうか。思春期の挫折と本人の性格的なものから、発現する問題行動は、型は違っている、事例1と根本においては同じように思われる。

今後、家庭の役割や、家族の絆、父母のモデルなどの確認を通して先ず両親が、互に愛情を確かめあう必要があるように思う。次に、B男の自主性を伸ばす方向で協力することが大切であると思う。それには、親が望むことと、B男が考えていることが必ずしも一致することばかりではないはずである。どれだけ、親がB男の選択を許容できるかと言うことではないだろうか。

もう一つは、両親が自分達の親との間の葛藤を、そのままB男との間にひきついでいるかもしれない。時間をかけて、両親が、話し合うことも大切なことと考える。

・ 家庭内暴力（特に母親に対し）の特徴的な状態を事例から検討してみよう。

(1) 母親に対する激しい暴力を実際にふるう。

母親に対する暴力と甘えと言う極端な行動で、母親を自分にひきつけようとしている感じがある。暴力も決定的に傷をおわせたり、致命的な打撃を与えようとしているのではないように思われる。

(2) 怒りに対する抑制力がないように感じられる。

(3) 学校では、多少の問題行動があっても登校する。（事例によっては、登校できない場合もある）

言わゆる内弁慶、外みそのような感じや、内づらが悪く、外づらが良いなどの感じがする。

(4) 成績は、割合に良い方なのに、すること為すことが稚拙である。

(5) 孤立感、空虚感、悲哀感を持っている感じがする。

(6) 現実の自己と理想の自己のズレが大きい。

B男は、暴力行為を現わすようになってから、19ヶ月になるが、暴力行為は、次第にその力を弱め、精神的に安定した方向に向っている。これからB男の越えなければならない山は、いくつかある。

両親との信頼関係、進路の選択から決定まで、交友関係などがある。特に、暴力行為が全くとおさまった後、無気力で、自閉的な状態が現われる場合も考えられる。

学校の対応としては、生徒全体の指導と一人一人の生徒の指導をどのように両立させていくかと言うことにつきると思う。少なくとも、人間が人間を操作することだけでは、解決できない問題があまりにも多くなりつつある。

今後の課題

・ 定期的な面接のつみ重ね。

・ 家庭で子どもが乱暴すること

私たちが、暴力と言うことを考えるとき、そのもとは、攻撃性と言う一種の衝動の結果として起こる行動だと考えることができる。だから、攻撃性をぬきにして暴力はありえないと考える。

攻撃性について、深層心理の分野や動物の行動の分野からの研究が多くある。

特に、動物の行動からみた場合、日常、目にふれることも多いのでわかりよいのではないだろうか。

動物の攻撃性は、基本的には性行動（種族の維持、生命の連続性）のためである。

多くの動物は、なわばりをつくり、雌を獲得するため、その中に他の雄が入り込むと排撃する行動をとる。このしくみは、親から伝えられた遺伝子に組みこまれているため、勝手にとりのぞけない。

せいぜい、そのしくみの働きをおさえたり、弱める以外には攻撃されて害を受けることを妨げない。

人間の場合は、どうなのであろうか。動物社会には、攻撃性はあるが残虐性はない。それは、動物の間で、死ぬまで傷めつけることはないからである。肉食獣が、生きる為に食べる最低限の飼として、他の動物を殺すことは、別にして考えていることは言うまでもない。

動物間で（主に同種）で斗って、負けた、あるいはかなわないと思えば、一方が逃げるか、降参の信号を送る。そして勝った方は、それ以上後追いはしないからだ。このことは、人間と動物を区別する大切なポイントだと思う。

そこで、人間の発達を大まかにみると、人間の攻撃性は、青年期に現われる。性腺（ホルモン分泌）の活動が活発になり、男らしさ、女らしさがはっきりしてくる時期である。

だから、子どもの攻撃性が、暴力になって現われる例が多くある。暴力を伴う非行、校内暴力、家庭内暴力、弱い者いじめなど様々である。

これらのことを大人や社会一般は、常に反社会的と言う目でみてきた。子どもが、そこで何を訴えようとしているか、何故暴力を用いなければならなかったかを考える努力がすくなかったように思う。

青年期は、性衝動がひき金となって、攻撃性の強くなる年令であり、しかも生れながらのものだから

とり去ることはできない。衝動をおさえ、弱めさせることしかない。その方法を覚えるのも青年期である。小さな時から、友達関係の中で耐えることを身につけておくことも大切な準備である。

十代に入って、親や、道徳、宗教などへの反抗と挫折の繰り返しのなかから身につけることが、以外と大切になる。

厄介な子どもの暴力行為などと言われてきた攻撃性は、彼らだけに責任があるだろうか。多くは、大人に操られておこした可能性を否定できないのではないだろうか。以前から、子どもの暴力は、非行と簡単にかたづけられてきた。そして非行は、貧困家庭、欠損家庭、崩壊家庭と相場が決っていた。

しかし、現在は、中流以上のインテリと言われる家庭に多い。考えるに、乱暴を起こす衝動を産む。原因は、欲求不満の表現よりも、快楽追求、無目的な場合もある。

であるから、暴力＝非行＝将来なんらかの罪を犯す者と言う図式は成り立たなくなっている。

以上のようなことから、家庭内暴力を考えると、一人一人の子どものゆがみとして簡単に考えられない。大人から子どもに加えられた暴力は、質、量ともにはるかに多く陰惨であったことを忘れてはならない。

子どもから遊びの機会をうばい、勉強を強制し、高学歴へ追いやることは、彼らに対する暴力かもしれない。最近、事例2で述べたような事例が、地方都市にもみられ、他の事例に比べてみると相対的には、すくないが、漸次増えていることは確かであると思われる。

勿論、暴力行為には、子ども自身のゆがみもあるが、彼らは社会や時代に対し、何らかの意味で、抗議しているのかもしれない。

文 献

- | | | |
|--------------------|-------|------------|
| (1) D. リースマン | 加藤秀俊訳 | 孤独な群集 |
| (2) 河合隼雄ほか | | 岩波講座 精神の科学 |
| (3) 各種講演、ケース記録、その他 | | |